

会所解体新書

10班メンバー

安井就一郎

(株式会社 大丸松坂屋百貨店 大丸京都店)

落海 達也 (株式会社 ハセ)

上田 知弥 (京都大学工学部 3回生)

横井 晴紀 (京都大学経済学部 2回生)

笠原 美由

(京都造形芸術大学情報デザイン学科 1回生)

テーマ設定の経緯

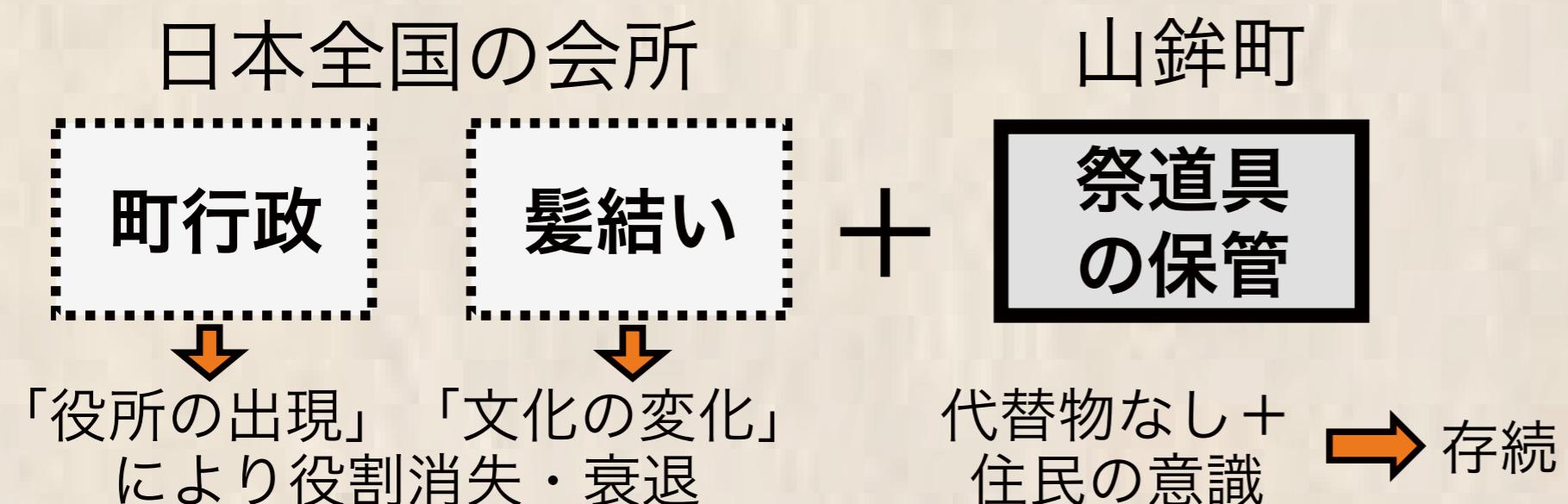
きっかけ

班員の住んでいる地域では古くからある長家の維持管理が課題。山鉾町に目を向けると、維持管理が課題になっている京町家があるが、一部は祇園祭の期間中に会所として公開されていることを知り、興味を持ったから。

これまでのこと

調査方法：文献調査+霞天神山保存会への聞き取り調査

会所の役割の変遷



応仁の乱以降、日本全国に町内行政の場としての会所が普及した。当時は日常的に必要だった髪結いを兼ねている場合が多く、町コミュニティの中心となっていた。加えて山鉾町では、町ごとに祭道具の保管も担った。

明治に入り、行政の中心が役所に移り全国の会所は衰退したが、山鉾町では祭道具の保管の役割が別にあったので、現在まで存続している。

これからのこと

ハードの面は、応仁の乱以降、祭道具の保管機能と集まる場としての集会所機能が維持してきた。社会の変化に対して、会所の形態を変えつつも維持されているこれらの役割は今後も不可欠であると考えられる。従来型の会所の保存価値の維持については、別途考慮する必要がある。

ソフトの面は、人生を超えるスパンで継続するためには、まず世代間の継承が必須。祇園祭期間以外にも年中準備はあるが、特になすことが多い祭期間中は年に1か月しかなく、完全にすべてを把握するには、3年～5年ほどの次世代の継続した参加が欠かせない。

次世代も同様に継承すれば持続可能だがばらばらに継承しても分散してしまう。問題は、おのの現世代から引き継いだ人々が、次世代間で強いつながりを持つかどうかである。

この点において、パートナーシップが必要であることがわかり、それは当事者が真に「楽しい」「取り組みたい」と思える環境があるかどうかによる。

調査内容

現在では様々な形態の会所があり、それらを比較・分析することで会所が形を変えつつ、あるいは変えずに維持されてきた会所の魅力・意義を探る。また、今後も会所が存在していくためには何が必要なのかを検証することとする。

変わる会所・変わらない会所



町家特有の箱階段。今でもこれを使用しているが、一方で会所自体には暑さ対策のエアコンを導入している。(霞天神山会所)

会所の役割を分類すると、祭道具の保管機能と、人が集まる場としての集会所機能となる。現代のビル型会所、従来型会所ともに有するものであり、上記の機能が変わらず維持されてきたことがわかる。

一方で人の関わり方については、一部の変化を受け入れた例がある。マンションが町内に新設された鯉山では、神事はかつてから住んでいる住人で執り行い、祭自体や会所運営には時間をかけてマンションの住民の参加も受け入れている。

